

6

稲作農家アンケート調査結果

| | |
|------|--|
| 目的 | 本調査では、高根の稲作農家を対象として、現在の耕作状況や稲作の手法、収穫したお米の出荷先など現状を確認するとともに、今後の意向を調査し、棚田保全に関わる課題と対策を検討する材料とする。 |
| 調査期間 | 2017年6月10日～6月30日 |
| 調査対象 | 高根集落内の稲作農家48軒 |
| 調査方法 | アンケート用紙の配布・回収 |
| 調査状況 | 配布件数 48件 回収件数 20件（回収率42%） |

高根の棚田の保全を考えたためのお米農家さん向けアンケート

Q1. 基本情報を教えてください

1.1. お米作りに関わっている方の年代を教えてください。

| 年代 | 今、回答している方 (〇をつけてください) | メインで耕作している方 (人数を教えてください) | 手伝いをしている方 (人数を教えてください) |
|---------|--------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| 20代～40代 | | 人 | 人 |
| 40代～54歳 | | 人 | 人 |
| 55歳～59歳 | | 人 | 人 |
| 60歳～64歳 | | 人 | 人 |
| 65歳～69歳 | | 人 | 人 |
| 70歳～74歳 | | 人 | 人 |
| 75歳以上 | | 人 | 人 |

1.2. 田んぼの所有面積を教えてください。

| 自己所有面積 | 返 | 借 | 作業受託面積 | 返 |
|--------|---|---|--------|---|
| 耕作面積 | 返 | 借 | うち減収 | 返 |
| | | | そば | 返 |
| | | | その他 | 返 |

1.3. 耕作している田んぼ1枚の作業面積で一番狭い田んぼと一番広い田んぼの面積を教えてください

| 一番狭い田んぼ | 返 | 一番広い田んぼ | 返 |
|---------|---|---------|---|
| | | | |

Q2. 栽培方法等、現状について教えてください

2.1. お米の栽培方法についてご存知ですか？

ある () ・ ない ()

2.2. 米づくりの仕方について教えてください

| 苗づくり | 自分でつくる | 農協から購入 | 個人から購入 |
|-------|--------|---------|--------------|
| 代播き | 自分で行う | 個人に依頼する | ライスセンターに依頼する |
| 田植え | 自分で行う | 個人に依頼する | |
| 稲刈り | 自分で行う | 個人に依頼する | ライスセンターに依頼する |
| 農業用除草 | 除草剤 | 返 | 防虫その他 |
| 田のり | 返 | 返 | 返 |
| 田のり回数 | 返 | 返 | 返 |
| 田のり回数 | 返 | 返 | 返 |
| 収穫調整 | 自分で行う | 個人に依頼する | ライスセンターに依頼する |

2.3. 機械の所有台数を教えてください

| 作業内容 | 人数 (自分でやることのみと人数を記入) | 手が足りない所 |
|-------|----------------------|---------|
| トラクター | ある () 借 () ない () | |
| 田植え機 | ある () 借 () ない () | |
| コンバイン | ある () 借 () ない () | |
| 乾燥機 | ある () 借 () ない () | |
| 精米機 | ある () 借 () ない () | |
| 米用冷蔵庫 | ある () 借 () ない () | |

2.4. 収穫したお米の行き先について教えてください

年間収量: 俵

| 用途 | 返 | 借 | 親戚や知り合いへの提供 (無償) | 返 |
|------|---|---|------------------|---|
| 直販先 | 返 | 借 | 返 | 借 |
| 自家消費 | 返 | 借 | 返 | 借 |

2.5. 米づくりに関わる人数について教えてください。手が足りない部分に〇をつけて下さい。

| 作業内容 | 人数 (自分でやることのみと人数を記入) | 手が足りない所 |
|------------|----------------------|---------|
| 苗づくりに関わる人数 | 返 | |
| 田植え | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 水まわり | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 草刈り | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 田んぼ | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 稲刈り | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 乾燥 | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 米の発送 | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |
| 米管理 | (自分・家族親戚 人・その他依頼 人) | |

2.6. これまで、お米を個人 (第三者) へ販売、直売所等で販売した経験はありますか？

ある () ない ()

2.6.1. 販売経験がある方は、販売して良かったことと悪かったことを教えてください。

良かったこと

悪かったこと

2.7. これまで、お米を農協以外の卸業者、飲食店等に販売した経験はありますか？

ある () ない ()

2.7.1. 販売経験がある方は、販売して良かったことと悪かったことを教えてください。

良かったこと

悪かったこと

Q3. 高根米の特長など思うことはありますか？ (複数回答可)

粘りが良い・香りが良い・粒が大きい・旨みがある・ツヤがある・その他 ()

2.8. 高根米が美味しと思う理由は何だと感じますか？

米質・水質・土質・環境・作り手 (人)・作り方・その他 ()

Q4. 今後のお米づくりの意向について教えてください。理由もお書きください

1. 現状を維持したい

2. 縮小していきたい

3. 拡大していきたい

4. 今のまま

5. やめる () 理由: ()

6. その他 ()

2.9. 今後お米をどのように売ってみたいと考えていますか

1. 農協に出荷するのみ

2. 直販販売のみ

3. 農協に出荷しつつ、直販販売も行う (販売割合 農協出荷: 新・直販販売: 俵)

4. 自家消費のみ

5. その他 ()

3.0. 今後1億円を超えて売りたいと考えていますか

1. 1万円～1万5千円 2. 1万5千円～2万円 3. 2万円～2万5千円

4. 3万円以上 5. その他 ()

3.1. 今後であれば現在の販売価格 (1俵あたり) を教えてください

1. 1万円～1万5千円 2. 1万5千円～2万円 3. 2万円～2万5千円

4. 3万円以上 5. その他 ()

4.0. 高根の棚田、米づくりに関してのご意見を自由にお願いいたします。

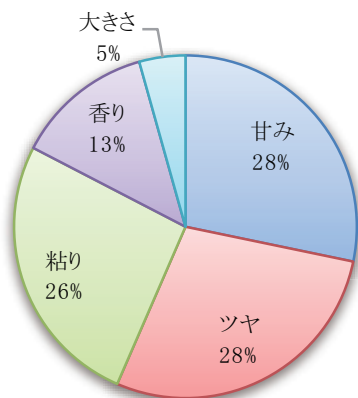
ご協力ありがとうございます。高根区民会館までご連絡ください。

高根米の特徴

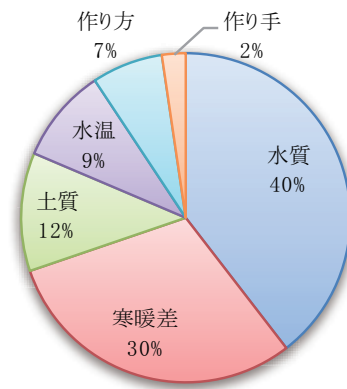
高根米の特徴は「甘み・ツヤ・粘り」

高根米が美味しい理由は「水と寒暖差」

「高根のお米は美味しい！」そんな声をよく耳にする。実際にお米を作っている農家は、高根米の特徴や美味しさの理由をどう思っているのか聞いてみたところ、山からの清水と、山々に囲まれているおかげで生まれる寒暖差のおかげで、甘み・ツヤ・粘りというコシヒカリらしさが前面に出たお米だということが分かった。



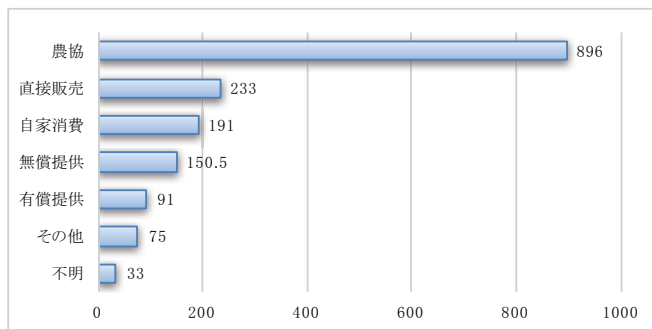
高根米の特徴



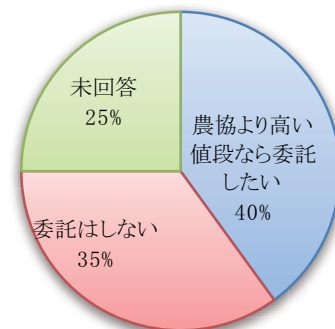
美味しさの理由

直接販売拡大の可能性、大いにあり！

アンケートを回収することができた28軒の収量だけでも、合計すると1669.5俵（約100t）あった。そのうち直接販売されているお米は14% 233俵（約14t）となっている。値段によっては委託販売したいという声が40%あることから、現在農協へ出荷している896俵（約54t）のうちの一部を直接販売できる可能性はある。



現在の販路 (単位：トン)



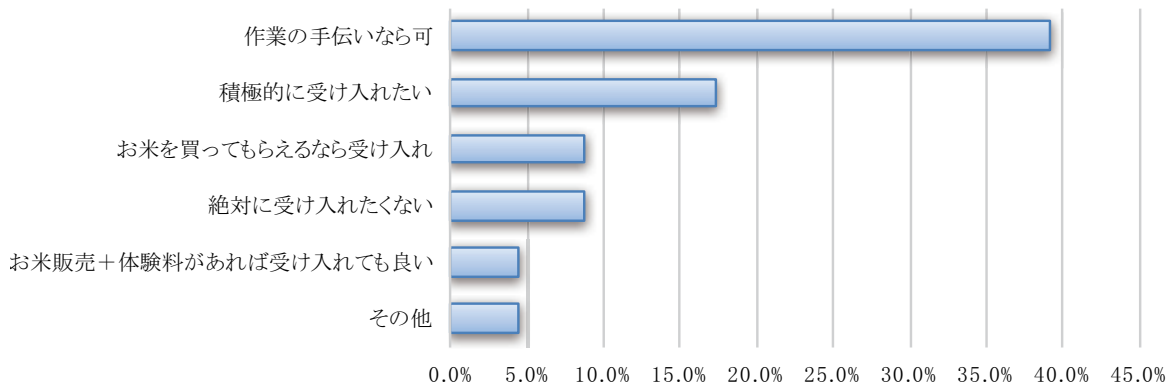
委託販売の可能性

体験受け入れ

お米づくりに関して、体験の受け入れをしても良いかどうか、どのような内容なら受け入れ可能かについて聞いたところ、作業の手伝いをしてもらえらるなら体験を受け入れるという回答が多く得られた。

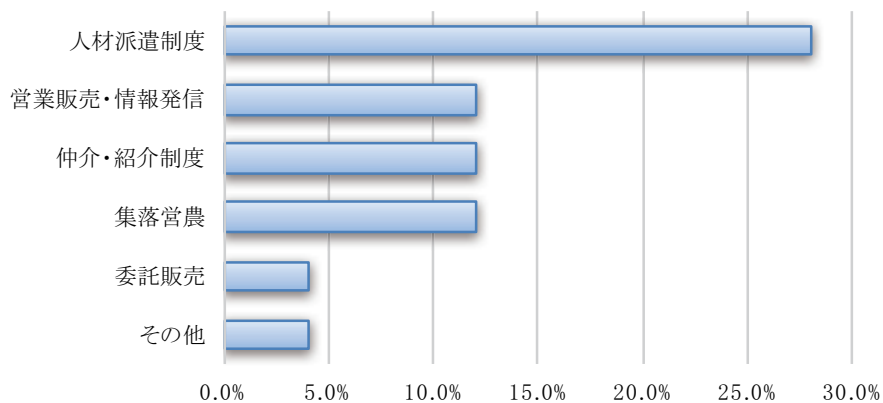
田植えや稲刈り体験をイベントとして行うお試し体験にはじまり、本格的な機械操作の体験、草刈りの手伝いなど、体験にも様々なレベルを設けることができる。

田んぼでお米をつくる大変さを学び、農家さんの気持ちに寄り添い、高根の米、田んぼに愛着を持ってくれる人を増やすことが、結果的にお米の販売へつながっていくかもしれない。



求められているのは人と情報発信

作業が機械化され、米づくりに関わる人数が減少している今、農家がどのような仕組みを求めているのかについて聞いた。田んぼの手伝いを依頼しやすくなる人材派遣制度や、営業販売、紹介制度などの販売仲介システムが上位になった。作業を手伝いできる人、お米を買ってくれる人とのつなぎ役と、高根のお米についての情報発信に取り組む体制が求められている。



7

調査参加者の感想

相馬 平（高根）

私はこの会に参加するまで、田んぼの水源がどこなのか、水路の管理は誰がしているのか、稲作をする場所ごとの生産性について考えたこともありませんでした。

この集落にいる限り、美味しいお米が食べ続けられるのだと思っていましたが、担い手不足、獣害もあり、10年後には、作らなくなっているであろう田んぼが、かなりの数あるのだとわかりました。

この会を通して、40歳も離れた先輩からたくさん勉強でき、考えも及ばなかったことに触れることができ、非常に良い機会であったと思うと同時に、引き継いでいかなければならないことが山ほどあると危機感を覚えた機会でもありました。

川畑 璃紗（東京大学2年）

棚田の調査をするまで、私はお米の美味しさや棚田の美しさばかりに注目していたような気がします。しかし、農家の方々から耕作状況だけでなく、水路や獣害など多くの点から棚田について聞き取りをして、棚田が抱える厳しい現実を実感しました。

高根の田んぼを守りたいという農家の方々の思いが届くように、そして高根のお米の美味しさがより多くの人々に広まるように、少しでも貢献できるような活動をしていきたいと思いました。

加藤 夢子（東京農業大学4年）

団地ごとで整備状況や獣害の被害の大きさにはバラツキが見られましたが、全体を通して高齢化が進んでいることは共通だとわかりました。孫に高根の良さを伝えたいから頑張らないと。とおっしゃる方もいて、お米を作るだけではなくそういった想いも棚田には詰まっているのだと知りました。

普段は聞けない農家さんのお話を聞くことができ、また、10年前の結果と比べることで、変わったこと、変わらなかったことを感じる事ができて良かったです。

田村 太志（高根）

この調査は、高根の田んぼには、田植えや稲刈りの時期しか関わっていなかった僕にとって、団地ごとの耕作状況や水の管理、獣害の事など初めて知ることばかりの調査でした。特に驚いたのは高根の田んぼは、ほぼすべての場所において高齢者が管理しているということです。

耕作者の高齢化はかなり深刻なようで聞き取り調査をしている時も「俺はあと10年経ったらもう田んぼは出来ない」と話していて少し悲しい気持ちになりました。今回の調査をしてみて、ほぼ1年通してやらなくてはならないことがある田んぼの仕事を何年も続けていくことの大変さや凄さを改めて知ることが出来ました。

稲葉 沙也加（清泉女子大学4年）

今回の調査から、10年前と比べ高齢化が進み、耕作している田んぼが減っていることがわかりました。また現在田んぼでお米を作っている方も若い人が少なく、今後更に深刻な状況になることがわかりました。

その中で印象的だったのが、調査の際に感じた高根の方の「高根のお米を守りたい!」という想いです。高根米がきっかけでお米が大好きになった私にとってこの調査結果は人ごとではありません。おいしい高根米が次の世代にも食べ続けられるよう、これからも様々な形で高根の棚田に関わっていきたく感じました。

濱野 元幹（キヤノン MJ 株式会社）

高根地区の大きな産業は、日本人の主食である「米」を中心とした農業。しかし、今回の調査により、担い手の高齢化や棚田の整備作業の大変さなどが原因で、年々作付面積が減っているという事実。また、農家への聞き取りにより、10年後は更に減少する作付面積を予想する事が出来ました。

今後、地区の皆さんとも現状と予想結果を共有して、これらの課題を解決する活動に結びつけていきたいと思いました。

8

調査を終えて

現在の耕作状況から見たこと

2008年に行った調査では、92町歩のうち86%耕作されていた田んぼが、今回の調査では26%減少し、59.8%になっていた。前回調査の10年後予測では、耕作されている田んぼが61%ほどに減ることが予測されていたため、それが現実となっている。

日本全国でみると、2008年の水稲作付け面積は1,624,000haで、今年2017年の作付け面積は1,478,000haとなっており、9%減少している。高根の耕作状況は全国平均の3倍の速度で減少していることになる。当然ながら、平場の圃場よりも耕作を維持していくことの難しさが見えてくる。それは各団地ごとの調査結果に顕著な数字として表れていた。

水路維持が大変、耕作軒数が少ない、獣害がひどいなど、条件の悪い団地ほど前回の10年後予測を超えて減少していた（試田・小ヶ崎・須戸俣）。その逆に、10年前の予想より減少しなかった団地も見られる。耕作軒数は減少しているものの、農地の集約化がされ、複数枚を管理しやすくするなどの工夫をしながら、耕作が続けられている。

10年後の耕作予測から見たこと

10年後の耕作予測は、現在の59.8%から約9%減の50.9%になった。高根の全圃場の半分である。各団地で見えていくと、やはり条件の悪い団地（水路管理、畦畔が大きく草刈りの負担が大きいこと、圃場が深いこと等）、稲作農家の高齢化が不安要素になっていることが分かる。

また、今回の調査では、10年後の予想は「分からない」と応えた団地が前回よりも大きく増えた。数字上、菖蒲池や東俣、大向は10年後の耕作が0%となっているが、これは高齢化からくる不安要素が強く表れ、「分からない」という答えになったものだと思う。おそらく、上記の団地について耕作されている田んぼが一切ないという状況はないと考えられるが、確実にやっていると言い切れない程に高齢化と稲作の収入減が農家を思い悩ます結果として表れた。

9

これから

皆が不安に思っていた棚田の未来。今回の調査を通して、その不安が目に見える数字となって表れてきました。機械化が進み、土地改良されて田が広くなったように、これまでも時代の変化に合わせ、米づくりの形が変わってきています。農家の高齢化、そして耕作する田の減少は、避けることができない時の流れです。

今後、農家の軒数が減れば、その負担は残る農家の肩にのしかかってくる。でも、その負担を農家だけには任せておけないほど、私たちは高根の棚田、そして高根のお米に支えられて生きています。

9年前の棚田調査後、2008年に村上市内で開催したシンポジウムでは、民俗学者の結城登美雄さんがこのように話していました。

「なぜ田んぼは大事か。昔、東北に住む人々は長い冬をどうやって越えるかということに怯えながら、必死になって野山を歩き回り、木の実やキノコを採取して、食べ物を貯蔵しました。そして、大変な努力で田んぼを拓き、お米を得てきたのです。1日で3坪程度の土地を拓き、水を引くのには恐らく、5年も6年もかかったでしょう。そういう先人達の何百年もの努力の末に今の高根がある。

その高根のような村のひとつひとつのまとまりを英語では family (ファミリー・家族) と言います。その family (ファミリー・家族) から派生して、farmer (ファーマー・農家) という言葉が生まれたように。ファーマーとはもともと、一緒に食べ、耕す家族のことを言いました。現在は食べる家族と耕す家族がどんどん離れて行ってしまっている。一緒に耕し、食べる人たちを家族と呼んだ頃からはばらばらに離れてしまったつながりをもう一度取り戻すことによって、都市に暮らしていても、安心して食べ物に困らない。そして、都会の人とつながりながら、ここの小さな集落で生きていく。農の営みを捨てることのないお互いの良い関係が、お米をはじめにできれば良いと思う。友達になること。お互いがお互いの苦労や、楽しみを分かち合うこと。離れていても気持ちの近い関係になるということが大切だと思います。」

これまでに、高根フロンティアクラブは、四季折々のイベントや食堂 IRORI などを通して、高根と地域外とのつながりを作ってきました。認定NPO 法人共存の森ネットワークの学生さんや、キヤノン MJ グループ、TOTO 株式会社などの企業・団体、そして多くの個人が高根を訪れています。そこでは美しい棚田、美味しいお米が大切な役割を果たしています。

そして今、高根に魅力を感じ、足を運んでくれている人たちと農家をつなぎ、お米の購入や作業の手伝いなど、直接米づくりを応援してもらうことで、これまでよりも深い関係を築ける可能性も広がっています。

農家を増やし、田んぼの減少を食い止めるための直接的な解決にはなりませんが、高根にとって大事な宝物である人と人のつながりを活かして「お米をはじめに…離れていても気持ちの近い関係になる」この言葉を形にするための一歩を踏み出したいと思っています。

調査にご協力いただいた皆様

《稲作関係者》

板垣 忠次さん 相馬 八郎さん 遠山 眞佐美さん
板垣 寿海さん 遠山 昭一さん 鈴木 一三さん
鈴木 正美さん 遠山 稔さん 鈴木 正二さん
相馬 勝男さん 林 堅一さん 鈴木 信之さん
相馬 貞夫さん 渡部 巽さん 稲作農家の皆様

《その他》

厚地 大輔さん 川畑 璃紗さん 遠山 寛大さん 平原 佐和子さん
五十嵐まどかさん 佐藤 萌子さん 遠山 博幸さん 福川 孝さん
板垣 一磨さん 志田 ちひろさん 遠山 祐一さん 福川 寿々音さん
稲葉 沙也加さん 関 友美さん 中矢 浩一郎さん 細井 幹子さん
海江田 祥平さん 相馬 大志さん 永田 健一朗さん 増川 葉月さん
柏村 遥南さん 相馬 平さん 成田 倫史さん 松田 富貴さん
金指 雄太さん 田崎 里歩さん 濱野 元幹さん 宮崎 珠未さん
加藤 夢子さん 田村 太志さん 本間 耕太郎さん 若尾 健太郎さん

《写真提供》

遠山 真治さん 細井 幹子さん 脊戸 大樹さん

《アドバイザー》

はますかむすび 牧下 圭貴さん
NPO 法人都岐沙羅パートナーズセンター

一般社団法人 高根コミュニティラボわあら団体概要

団体名：一般社団法人高根コミュニティラボわあら

設立年月日：2016年5月25日

新潟県村上市高根で高根のため、高根の子どもたちのために高根の未来を考え活動する団体です。

わあらとは高根弁で「私たち」という意味です。高根にある豊かな自然を活かした暮らしをつなぎながら、高根に暮らす人たちがいきいきと、笑顔で楽しく過ごしていくため、40代以下の世代を中心に“これから”を見つめていきます。空き家の活用、子どもから高齢者の方までが集える場づくり、地域内外との交流促進など、今ある課題と向き合いながら、高根に暮らす人たちが「大好きな高根にいられて良かった」と言い合える。そんな私たちのための高根を、自らの手で創っていくことを目指して“わあら”は活動しています。

- 役員体制 代表理事：遠山真治
- 理事：吉野奈保子・鈴木信之
- 監事：遠山充・遠山俊之
- 事務局：能登谷創・能登谷愛貴

編集後記

9年前、「共存の森」の学生として調査に携わり、今回は高根に住む人間として同じ調査に携わりました。高根に移住して、早くも9年目を迎えています。

今思えば、前回の調査で棚田が稲作だけの問題ではないと気づいたところから、高根にもっと関わっていくにはどうすればいいのかを考えたことが、移住するきっかけのひとつになっていたのだと思います。

今回の調査では、後継者問題や担い手の高齢化、維持管理の難しさが9年前より鮮明に浮き出る結果となりました。しかし、これらの問題は今に始まったものではなく、高根の人々は何度となく解決に向けて様々な努力や取り組みをしてきても尚、止めることが難しいものなのだ、この9年間、高根で生活してきた中で学びました。そして、周りの方々の支えがあったおかげで、今、高根で生きることができていると実感しています。棚田を守ることも支え合いが大切で、支え合わなければ継続していくことはできないのだと、高根で暮らしたからこそ本当の意味で理解することができました。

この調査は明るい未来が見える調査ではないと、実施する前から分かっていたことであり、気重であったのは事実です。しかし、この事実を高根の若い世代、共存の森ネットワークの学生やCSR等で関わってくださる企業の方など、高根外の人も共有し、解決に向けて考えることを諦めてはいけないと思い、実施しました。

この調査結果を受けて、高根の農家の皆さん、高根の若い世代、高根に通ってくれている皆さんと一緒に、課題解決に向けて様々なアプローチを考えたいと思っています。

一朝一夕に解決できる程簡単なものではありませんが、高根に生きる人間として一端を担い、考え、行動し続けていきたいです。

最後になりましたが、この調査に携わって頂いた多くの皆様に心からの感謝をお伝えするとともに、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。そして、今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

一般社団法人 高根コミュニティラボわあら
事務局 能登谷 創・愛貴



高根棚田耕作状況調査結果報告書

2017年10月発行

編集・発行

一般社団法人 高根コミュニティラボわあら

〒958-0211 村上市高根 679-1 TEL:0254-75-5066

協力：高根活性化委員会



公益財団法人

トヨタ財団

この調査は公益財団法人トヨタ財団の「しらべる助成」を受けて実施しました。